

Title	小さな自伝：履歴書に代えて
Sub Title	Eine kleine Selbstbiographie
Author	塚越, 敏(Tsukagoshi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.205- 210
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0205

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小さな自伝

——履歴書に代えて——

塚 越 敏

人は誰でもこの世に生まれて、自伝をつくっていく。長くて退屈な自伝、短くて忙しい自伝、肩書の沢山ついた田舎ぼくてみっともない自伝、肩書などないもない、一見貧相にみえるが誠実な自伝。羨ましいのは、極度に燃えあがり、人知れず散っていった人の、生きた自伝だ。それに比べれば、私の自伝なぞ、外界との接触でいつも挫折に終始した内面の小さな経過にすぎない。

私は、ロシア革命の成功した記念すべき年に、公害の源泉ともいうべき足尾銅山に生まれた、——自由と圧迫。その圧迫の側に立って、なんと公害と戦っていた科学者の父は、父自身が資本主義の圧迫に耐えかね、幸い病いに倒れたのを機に、療養のため鎌倉に転地した。そこで私は、私の幼年時代を潮騒の響きと陽の輝きでいっぱい自然のなかで過ごすことになった。おそらく私の生涯のうちで最も美しい季節であったにちがいない。だが、そんな素晴らしい環境から、私は不意に引き離され、家族ともども東京に移転した。私の教育のためだと、その理由を後になってから聞かされた。

私は貴族の学校に入れられた。だが、いつまでも自然のままに生きようとする私と、虚飾と慣例に自由を奪われ

つつあった少年たちとのあいだには、当然のこと摩擦が生じるようになった。自然よりも現実の虚構のほうが強かったから、その摩擦は私の心のなかで烈しい痛みとなった。いちちやそれと察した母は、その痛みを宗教で和らげようとした。

こんどは宗教の学校に入れられた。宗教で心の痛みが治るものではなかった。むしろ宗教の本当の意味はわからなかったが、人びとは互いに慰めあっているようであった。私が黙っていると、みんなは安堵していた。もう嘘をつくことも、仮面をかぶることもできていた私、——それも防御のためであった。そのうち内側では、反抗期と思春期が密かに始まっていた。これは、母にとって、なによりも恐ろしいことであった。母は私を音楽の世界へと向かわせた。生真面目な兄の発案であつたらしい。もともと音楽の好きであつた私は、音楽で大いに贅沢をさせてもらった。だが芸術は天才のもの、音楽で身を立てようとは思わなかった。音楽のお蔭で危険な時期は無事通過したものの、芸術に心酔した者が、芸術家同様、どうして世の俗悪さに刃向かわずにいられるだろうか？ 私は大いに攻撃的になった。教師達は、扱い難い私に反感を懷いた。その反感に、私は成績で報いた。私は折れなかった。

ところが、或る日、奇妙なことが起きた。学校の昼休み、友人の一人が笑いながら昼食をとっている姿が、不意に私の目に飛びこんできたその瞬間、突如、烈しい嘔吐を催したのだった。精神分析でどう扱うのだろうか、——それから、ひどく憂鬱な状態が続いた。二度も結婚に破れた潔癖な叔母が心配してくれた。敗者として感じる、生きることにへの恐ろしさであつたのかも知れない。ずっと後で、カフカに出会ったとき、私はほっとしたものだ。私は高等学校にすすんだ。期待は大きかった。だが期待にそってくれる教育はおこなわれていなかった。知識は与えてくれるが、解釈は時勢や道徳と結びつき、本当の意味は隠されたままだった。戦前の右傾化で、先生たちは

沈黙していた。ただ漢文の先生だけが、韓非子の性惡説による峻烈極まりなき攻撃精神を時代の権力者に向けていた。外部では最も恐るべきものが、さまざまな美名のもとで、最高の權威と結びついて、戦争へと突進していた。人びとは騙され、歓声を挙げて酔っていた、なんとという絶望的な狂氣！だが、じっと堪えて黙っていなければならぬ。狂氣が権力と結びつくと、地獄だ！するとまたあの憂鬱な状態が始まった。ときには間歇的に、ときには烈しく、かなり長いこと続いた。外界よりも恐ろしかった。そうなる人々の底意がみえてきて、世俗の虚構にたいする嫌惡が激しくなり、いまや、私にとって芸術と文学とだけが、唯一の救いとなった。芸術も文学も、^{あは}発くからぬ。こうして私は、父や母の意に反して、文学への道を選んだ。

私は大学に入った。世俗はすべてを捲きこんで、戦争へと驀進していた。文化は、疲弊して、どんよりと曇った空のもと、冬枯れの桑畑のようだった。大学では、講義も演習も続けられていたが、生彩を欠いていた。戦争へと鼓舞する先生はいなかったが、煮えくりかえらなかつた、自暴自棄になつていたせいかな？誰もかものを言わなくなつていた。暗い時代の影響であつたのだ。勇氣が欠け、良心が腐り始めていた。私は人間のおぞましい姿を垣間見ることもあり、文学にかかわる場ゆえに、私の他人への不信任はいっそう増大し、しばしばは輕蔑や憎惡にさえ変わった。独りで歩まねばならない。そう決心した私は、それからはなんの氣兼ねもなく、自分の研究の準備を始めた。そんなときの冬、風邪をこじらせて、父が不意に亡くなつた。はつきりものは言わぬほうがいい、そう言つてくれた父、ひどく悲しかった。

私の大学生活の終末は、戦争も下り坂になつて、荒野を駆けめぐるようだった。そそくさと後片付けをすると、それで終つてしまつた。慘憺たるものだった。焼夷弾で、東京は焼け野が原となり、私の家も焼けた。もう敗戦は

間違いなかった。もうしばらくの辛抱だ。やがて来るはずの召集令状をまえに、終戦となった。生涯のうちで、嬉しきのあまりあれほども感激したことはなかったろう。すべての権威が音をたてて墜落していった。為政者にたいする憎しみ、戦争の愚への貶^{おとし}み。これほどの惨禍をまき起こしておきながら、なお居直る為政者、なぜナチを徹底的に弾劾したドイツのように弾劾しないのか？ 悪の温床を残したまま見かけは民主主義の仮面をつけただけだった。これでは、小羊の毛皮のかけから、いつ狼が正体をあらわすかわからない。

私は北海道の大学に勤めることになった。そこには妻の家もあり、家を失なった私の暫定的な安住の地となった。一時はほっとしたもの、戦争の煽りをくった地方都市の草炭をストーヴで燃やすことは、悲しかった。こうした戦後の悲惨のうちに、寒い冬の日、母は梅の木ので倒れ、老後の楽しみも知らずに他界した。やはり私は中央に舞い戻らねばならない。出世・肩書き欲しさの田舎じみた憧れからではない。遅れを取った研究を挽回するためだ。地方の名士になったら、命取りだ。競争し、戦わねばならない。

幸い慶応大学に職をうることができた。ひどい打撃を受けていたものだ。雨が降れば、屋根にあたる雨足の音で、授業は中断せねばならなかった。栄養失調で亡くなった先生もいた。つらい日々が続いた。なんと長いこと中断されてしまったことか、戦中、戦後、十年の余、それから研究が再開されたのは、ようやくと輸入図書が入ってきてからのことであつた。それも地獄に落ちたドイツからの図書ゆえに、最初のうちはごくわずか、間遠にしか入ってこなかった。それゆえに返ってじっくりと読むことができたのかも知れない。知識や教養よりも、自然を通して生に触れようとしていた私、それにまた不信感から孤独を好むようになっていた私は、その頃ようやくとヨーロッパから聞こえてきた実存主義に魅惑されてしまった。そのとき、自分では意識しなかったが、私の道は決定し

たのだった。その当時の私には、実存主義は、観念的なものではなく、生身の体験であった。世俗的には「無からの出発」をせねばならない私であったからだ。そして私が、それを研究の対象である詩人に向けたとき、まだ誰にも解き明かすことのできなかった「難解な」詩が忽ち氷解したのだった。いや、そればかりでない、私はその詩を身をもって追体験することもできた。これは無上の喜びだった。もはや文学は机上の教養的なものでなく、体験となったからだ。実存行為を徹底し、やがては（東洋的な）形而上的世界（オルフォイス的神話）へと向かったこの詩人は、私にとってますます好ましい対象となった。詩人は、ヨーロッパの土壤に栄えたものを、教養否定の解釈で、もう一度解釈しなおしていた。骨が折れた、——つまり私のほうがヨーロッパ的教養をあまりにも身につけてしまっていたからだ。詩人は教養的な水平の歴史を嫌い、存在的な垂直の歴史を好んだ。それでこそ本質的な深みに触れるからだ。東洋人である私は、東洋人であるがゆえに、この点でますます詩人に魅かれていった。こうしてこの詩人に、私は私の生涯を捧げることになった。

大学時代、一生をひとりの詩人に捧げて、研究に没頭しておられた先生がいた。その詩人は教養的といわれているが、その底にはスピノザ的・東洋的なものがあつた。だから先生の講義は、借り物の講義ではなくなっていた。自分の説を主張し、情熱的であつた。私の場合も、研究が進めば進むほど（教育が職業化するとき、教師は墮落すると自ら戒めながら）、学生に向けての講義に情熱をこめた。このことを理解してくれた学生は、私のところに集まってくれた。職業を選び損っている学生とは違い、自分自身に厳しい真摯な学生、未来の研究者、いま私は、こうした勝れた若き研究者を、わずかなりとも世に送り出せたことを、私の半生を捧げた慶応大学にたいする唯一の感謝の印だと思っている。私は、愚かな学生を、世には送り出さなかつた、世の中が混濁するからだ。送り出した

もので、過ちを犯す者があれば、私は責める。

象牙の塔にこもった、この人間嫌いの私、集団への誠実な参加もできぬままに、住みなれたこの大学を、やがて去ることになる。だがそれが、私の学問的業績の終りを意味するものではない。私の自伝はまだ続く。いや、むしろ、これからが私の自伝に花の咲く季節かも知れない。書き留めただけに終わっている原稿の整理と発表とが、これからの仕事となるからだ。でも、いつ不意に襲われるかも知れない。そうなったら、私の自伝は、剰余を残したまま、ぶつ切り切れるだろう。